

井上周八教授の人と学問

研究・教育・実践につらぬくヒューマニストの意識

久保田 順

大正から昭和へ、元号の改まる直前に生れた井上周八さん——さん付けでよばせて下さい——を語る時、どうしても私には、大正という時代の学問や文化や教養の独特の資質が、井上周八さんの身体の奥に深々と沈められていて、精神的態度の基層をなしているように感ぜられてならないのである。36年という長年月、共に歩んできた私には、そう感得されるのである。

研究——エロシェンコ

立教大学大学院の新入生、同期生として桜の樹の下で顔をあわせたといっても、すでに井上周八さんは立教と東京商大の両大学卒業の学歴をもつ年長者で、しかも人生の荒波、大波小波をくぐり抜けてきた苦労人の風格をそなえた兄貴的存在であった。爾来36年の久しきにわたって私は、学兄の独特の精神的態度と尋常一様でない鋭い理論家としての資質から、大きな啓示をいただき続けてきたのである。

私たち、それは共に山本二三丸先生のご教導の下に院ゼミ生であった市川深君（現、東京経済大学経営学部長）、田村信吾君（現、立教大学図書館副館長）を加えた四人であるが、私たちは文字通り学友として顔をあわせれば常に討論また討論であり、それが一楽また一楽であった。酒席にあっては、いまでは全く忘れ去られて歌唱されることのない「立教大学寮歌」を、私たちは本当に高吟していたのである。

棘路とおくたどり来て	あゝいつの日か「立教」と
同じ園辺に慕いよる	さらばと記す旅の日は、
眉若げなる友はみな	あゝいつの日か「立教」と
真理の旅の人ならむ	涙ぐみつゝ語る日は
されば短かき青春の日を	想えば更にひたせまる
かたみに愛と歌わずや。	高鳴る胸をいかにせむ。

私たちの「青春^{はる}の日」の原風景を、彩ってくれた一枚の絵画があった。中村彝の「エロシェンコ氏像」である。私たちは教場での討論の延長戦をきまって新宿中村屋へと舞台を移し、餡まん、肉まんの二ヶ一皿をやりながら激烈に延々と続けるのであった。幾時間経過しようとして文句一つなく、濃い緑茶を何度でもつぎ足してくれた新宿中村屋こそ、私たちの経済学理論研鑽におけるアジールであった。

「エロシェンコ氏像」はその新宿中村屋の一隅にかかげられていた。亜麻色の髪も長く、ルバーシカをつけた盲目のロシア青年の像の前で、私たちはいつも深々とした感銘をうけるので

あった。青年の横顔のなかに意志の力と未来への憧憬を感じるのであった。後年、臼井吉見『安曇野』によって亡命者エロシェンコの実像を識ることになるのであったが。

ややあって私たちの中村屋製・価値論論争は、われらがホープ、井上周八学兄の処女作を誕生させる。マルクスの「地代論」を価値論との「直接かつ意識的な連関」において把握しようとした『地代の理論—戦後論争点の批判的考察』（理論社、1963年）の上梓であった。

『資本論』の地代篇の理解のためには、それ以前に展開されている経済的諸範疇の理解が不可欠の前提である。この意味で地代論を理解することは、マルクス経済学一般を理解することでもある。と同時に地代論はまた農業経済学の基礎・出発点でもある。何故なら、土地を不可欠とする農業生産における資本と土地所有の問題が、農業経済学での主題の一つをなすからである。ここに、「地代論」が《経済学の頂点であり、最後の一節であると同時に、農業経済学の出発点である》といわれる所以がある。

ところで、「地代論」が科学たりうるためには、マルクスが、『剰余価値学説史』で指摘しているように、それは価値論との関連において把握されねばならなかった。」のである。

その価値論との連関において軸心をなすのは、「虚偽の社会的価値」の把握いかんであった。周到な諸説への検討をへて、その把握に独自の光をあてた地代論における井上説の構築にいたるのであった。新進研究者として異例のはやさで学位が授与されると共に、その研究業績は今日まで、地代論研究者の必読文献としてゆるぎない地位を得てきたのであり、今は若き古典といつてよい。

井上・地代論の構築までの、息つくひまなき刻苦勉励の井上周八さんの「青春の日」の姿は、エロシェンコのあの姿形と共に私たちにはとうてい忘れ得ぬものであった。

旧制高校生の必読書ともいふべき阿部次郎『三太郎の日記』や倉田百

実践——西田天香

三『愛と認識との出発』等々へ、井上周八さんの話がおよぶことが少なからずあった。まことに大正期教養主義を色濃く内在させながら同時に、先鋭な左翼理論を展開する独特の精神的態度の持主であった。昔、井上さんのご教示にあずかり、いまま共に人生訓としている言葉がある。西田天香の「過去は懺悔、現在は感謝、将来は報恩」であった。更に天香の『懺悔の生活』（新潮社刊、初版1913年で当時のベストセラーであった）もすすめられたが、未読のままである。井上さんが西田天香に魅せられている理由はいまひとつあった。それは京都・山科に設立された一燈園における天香の行動様式であった。日本的共同体の生活組織、研修組織のもとでの運動・実践、コンミュンとしての在り方であった。井上周八さんはまた理論の人、学究のひとであると共に実践の人、運動のひとであった。書斎のひとであると共に行動派の学者であった。戦後日本の歴史のエポックをなす大きな運動、朝鮮戦争時、反安保、ベトナム反戦、全国的な大学紛争時などには必らず渦中において活躍し、常に信ずるところに立って、誠実に取組んでいた姿が臉にうかぶ。まさに百戦練磨の井上さんであり、修羅場に強い井上さんであった。

農業問題における理論と実践の関連について井上周八さんはつぎのようにのべている。

「私たちは、日本農業の提起している諸課題の実践的解決という立場に立ち、マルクスの地代理論を日本の現実はどう創造的に適用するか、もしくは適用のための前提理論としてどう身につけるかということが何よりも重要だと思います。理論はつねに実践的課題との関連においてのみ発展するからです。日本農村における戦前戦後の土地所有関係、農村における階級階層区分、農基法下の農産物価格問題、毎年の米価闘争の理論的解明、酪農民の当面する乳価問題など、どれひとつをとってみても、マルクス地代論の把握なくしては根本的に理解することは不可能でしょう」(『農業経済学の基礎理論』東明社、1967年)

さらにまた井上周八さんは、和田八東経済学部教授と私も参加しての共著『現代日本経済の批判』(文真堂、1974年)において「社会変革」の基本点を提示して、「70年代の日本経済を批判的にみる目を私たちは持たねばならない。国民の多数が自覚して体制を批判し、より高次の社会制度を求めて行動するなら、社会的正義と人類の福祉への前進がみられるであろう。基本は国民ひとりひとりの自覚である。下からの自覚がともなわぬ社会変革は、結局、別な形態での社会悪を再現するのではないだろうか。ソ連の官僚制が批判されたり、中国での連続革命が重視されるのも、要は下からの自覚、民主主義、大衆路線の堅持が何よりも大切なことを教えているといえよう。もし下からの体制変革の必要の自覚がなければ、天才的指導者や革新政党によって、社会変革が仮になされても、歴史の教訓が示すように、人間の自由な発展が保証されることはないであろう。《革命をすることより革命を守ることは百倍もむずかしい》ということばの意味はこの点にある」とのべていたのであった。井上周八さんの学問は、常に私たちの社会が直面する問題に取り組んで、そこから理論的帰結と共に実践的帰結をも明確に提示されようとするもので、私たちを誘いこむ迫力に満ちていた。

山形県上ノ山を生れ故郷とする井上周八さんは「農民の心」をもち
教育——宮沢賢治

「生産農民の立場」を主張しながら日本農業の現状分析をつづけてきた。日本各地の農村調査では、農業問題研究会の部長としてメンバーの学生を連れて毎年、精力的に活動していた。かざらない人柄で、正直な気持をまっすぐに表すことの出来る井上周八流の農村調査は、深いところで農民と交り、その上で成立した調査であった。いまあれこれを紹介するいとまはないが、調査の旅には、行く先々で農民との交流・交信の様々なエピソードがあった。同朋同行の学生たちがそこから学んだものは教場ではとうてい得られない別種のもので、調査旅行を学習の場としてノリにノラせる教師としての手腕はいつもいつも見事なものであった。井上周八さんは天性の教育家であった。

多年共に語りあった人物論のなかで、学兄がもっとも多く触れもし、心酔してもいた人物は宮沢賢治ではなかったか。「雨ニモマケズ」から法華経信仰まで語ってつきないのであった。いくたび小岩井農場のお土産も頂戴したことか。また因に夫人のご実家は盛岡で、その兄君は、賢治の母校であった県立盛岡中学、現盛岡第一高校で教職にあられた御方であった。井上周八

さんのなかに色濃くある教師性を、賢治における教師像と安易に重ねるつもりはないが、最近手にした畑山博著『教師 宮沢賢治のしごと』（小学館、1988年）にえがかれている教師と教え子との間の、いきいきとした息ぶき、呼吸は「教師 井上周八のしごと」のなかに、ある種の親近性をもって私には感ぜられるのであった。

教師時代の賢治の幻の授業を再現しようとされた畑山博氏は「個性ある教師は現場にいつらくなり、心ある教師は沈黙する。教師たちが無気力、無感動に進学率アップのマシンとして生きることを強制される嫌な時代になってしまった。そんな中で、砂漠にオアシスを営むように個性とルールの調和を問いつづけているチャーミングな教師たちに、ごくたまにだが出逢うことがある。と、そんな教師たちの思索のルーツをたどると、必ずといっていいほど賢治にたどりつくということに、私はある戦きをおぼえてきた」とのべるのであった。また『校本 宮沢賢治全集』（第12巻（上）筑摩書房、1975年）の「月報」には一時期、社会教育の一環として開設された岩手国民高等学校の受講生であった伊藤清一氏の一文が掲載されている。「国民高等学校の開設中は、真冬でありますので毎日寒い日が続いて、手や足が冷たくて困ったことを覚えています。その時つくづく感心されたのは、それらの寒いはいげしい行事を、宮沢先生は率先して、私達生徒とともに、実行されましたことです。また先生は、責任観念の非常におつよい方で宿直の場合など、校内を巡視され、火の消えたストーブに自ら手をあてて、その安全をたしかめられました。先生は、私達共々罪のない話をして笑い合うこともありましたから、先生の宿直の日を楽しみにお待ちしております。（中略）宮沢先生が、この国民高等学校で〈農民芸術概論〉の講義をせられましたことは、周知の通りであります。これにはいかに全力を傾注しましたか、今五十年前の受講時をふりかえり感激に耐えません。（農業自営）」とある。

これらの文章のなかに甦る教師・宮沢賢治は、あきらかに井上周八さんの教師としての「思索のルーツ」をなしていた筈である。また周縁からの、しかし長年月の、井上さんの教師生活の一動一静への目撃者たる私には、そこに、岩手の農業自営の受講生が回想している賢治の教師振りのイメージとが重なってくるのを禁じえないのであった。

教師論を自から語った文章も井上さんには少なくないが、別して忘れ難いものに、30年近くもへだたった昔日の新任教員時代の言葉があった。「終戦、そして復員復学。わたくしが高畠訳の『資本論』を初めて手にしてから、早くも十六、七年の歳月——この間、多くの時間を学問以外のことに使ってしまったが——が過ぎ去った。いま、学校教師という有難い職業のもとに、ここ十年來の自分なりの成果を一書にまとめて出版できることに感謝している」（前出『地代の理論』のまえがき）。「学校教師という有難い職業のもとに」という自覚は、苦勞をつんできた井上さんの言葉であればこそリアリティに裏打ちされていた。当時私が、「井上さん、いい言葉だね」と感心してみせると、学兄は軽く頷いていたが。駆出し教師から今日まで、この言葉に込められた初一念はゆるぎなく持続されてきたのであった。

人情——荒畑寒村

研究・教育・実践のすべてにヒューマニストの意識を貫徹させながら、真摯に自己の道を歩んできた井上周八さんは、決して四角四面の堅物ではない、それどころか、実に天稟ともいべきユーモアの才と人間的温かさに溢れるパーソナリティをもって私たちを魅了してやまなかった人物である。それは、ヒューマニストという言葉ではいい足らぬ、もっと世話にくだけて「人情のある」大学人というネーミングが適切だ。かつて幾たりかの論者が敬愛の念をこめて荒畑寒村を「人情のある社会主義者」という評言でたたえたことがあったが、「人情のある」という惹句はわが井上周八学兄のものでもある。

つとに井上周八さんは、朝鮮民主主義人民共和国の政治経済の実態を高く評価し、その指導理念「チュチェ思想」に傾倒してきた。最近の論文「1990年代の課題」（『立教経済学研究』第43巻第3号、1990年1月）においても、「模範的な社会主義国は、私のみるところでは、朝鮮民主主義人民共和国ただ一国である」と論定し、最新刊の『人間中心のチュチェ思想』（チュチェ思想国際研究所、1990年2月）では「今日、人類の歴史は主要な転換期を迎えています」という文字を冒頭におき、世界史の激動・変化の今日的状況に対応させて、重ねて「チュチェ思想」の意義を強調されるのであった。今日、およそ知的営為をこととしてきた誰れもが、知的怠慢をきめ込まない限り、現下の世界史的状況に對置させて、自分自身の思想の点検と課題認識の提示を迫られているはずであるといつてよい。

わが井上周八さんにおける思想的到達点とその世界史的展望は、旗色鮮明にして確信にみちたものであった。片々たるオポチュニストには断じて見られない、今も昔も変わらない精神的態度なのであった。そうした思想的営為一切の核心にあるものは、「人間中心の」「人間の顔をした」、更にいえば「人情のある」という価値前提なのである。かかる価値を基軸において心底信じて揺ぎない「思想」と「体制」を発見し、出会ったのである。ここに私は、あの寮歌のひとつふし「されば短かき青春の日を」から一直線につながっている学兄のヒューマニストとしての真面目を看るのである。

終りに、友垣に結ばれる一人として希求する一点は、学兄が確信をもって取り組んでいる終生の仕事を、思想としても実態としても掘り下げ、更に掘り下げて、日本の民衆のもっと広汎な層に、当り前の市民に、より一層の説得力をもって語り続けて下さることを、つまり「報恩行」をである。

以上だんだん、「井上周八教授の人と学問」について申し述べてきたが、いささか感傷に傾むいたかも知れない。私が語ろうとすれば、こう語る他はないのである。それが井上周八さんである。